

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第7号

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩
黒川 忠広

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究
ー県本土を中心とした集成と若干の考察ー
相美 郁恵

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性
東 和幸

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について
調査課第一調査係, (株)パレオ・ラボ, (株)パリオ・サーヴェイ

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析
中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永瀨 功治

地域の素材を活用した社会科の学習指導
ー地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通してー
宗岡 克英

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介
上床 真

収蔵遺物保存活用化事業
ー堅野（冷水）窯跡の再整理を中心にー
調査課第一調査係

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作
ー墨書の再検討と実測図の修正ー
調査課第二調査係

平成 25 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2014. 6

『縄文の森から』第7号 目 次

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩

黒川 忠広・・・ 1

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究 ―県本土を中心とした集成と若干の考察―

相美 郁恵・・・ 9

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性

東 和幸・・・ 25

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について

調査課第一調査係

(株)パレオ・ラボ, (株)パリノ・サーヴェイ・・・ 33

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析

中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永瀆 功治・・・ 45

地域の素材を活用した社会科の学習指導

―地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して―

宗岡 克英・・・ 51

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介

上床 真・・・ 57

収蔵遺物保存活用化事業 ―堅野（冷水）窯跡の再整理を中心に―

調査課第一調査係・・・ 65

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作 ―墨書の再検討と実測図の修正―

調査課第二調査係・・・ 83

平成25年度年報・・・ 87

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性

東 和幸※

A systematic designing of Kagoshima (Tsurumaru) castle town

Higashi Kazuyuki

要旨

鹿児島（鶴丸）城は慶長6（1601）年に初代藩主島津家久によって築城がはじめられ、これに併せて城下の町割も計画されたと考えられる。設計した人物は鹿児島県の地形を熟知した上で、尾根と海岸線の最も狭い部分を中枢部とし、道に150°の角度を3回とり入れることによって東西南北軸の主要街道に合わせている。直線道に合わせた方形の区画や町の拡大など、綿密な計画の下で町割を行ったことを明らかにする。

キーワード 鹿児島城下 近世初期 地形 東西南北軸 町割 計画性

1 はじめに

前号で筆者は、中世末から近世初頭の各当主がつくった城を追いながら、東西南北軸から地形軸に大きく転換したことを示すとともに、鹿児島城下が壮大かつ緻密な計画性の基でつくられたことを述べた（東2013）。今回は鹿児島城下の町割に主眼を置き、これまでの研究史を踏まえながら、鹿児島（鶴丸）城下町の高度な計画性について述べることにする。

2 鹿児島（鶴丸）城下設計についての先行研究

先行研究については、各研究者の論点をはずさないようにするためと、筆者自身の覚書とすることも含め、箇条書きとする^{（註1）}。また、年代の古い方から順に記したので、後で同様のことを述べている部分については省略した。なお、本稿に関することだけを抽出したので、必ずしも各研究者の最も述べたかった論旨ではないことを断っておく。

（1）佐多武彦氏の研究（佐多1937）

1937（昭和12）年に記された論文であるが、その後各研究者が述べることのほとんどを指摘している。手に入れにくい論文であるので、佐多氏の論点を箇条書きにして引用する。

ア 「薩摩大隅及び日向の諸県三郡を挙げて管理する一地方の大守の首府を何処に定むべきかを道路網並びに沿海港湾等の関係より考察するに大隅の国分平地か薩摩の鹿児島県の平地の一なるべし」

イ 「先づ全体上此の両地は中心にして日向方面人吉水俣方面或は南隅南薩方面よりする上陸部隊に対して攻勢を取るに際し作戦上尤も便利なり而して大島琉球を配下に容れ舟楫の運用に照らせは国分は港泊なく且つ稍僻在せるを以て此の関係より

鹿児島を可とすべし是れ国分より鹿児島に城下を徒せし大原因なるべし」

ウ 「甲突川等が今の流域と為りしは甚だ古きことに非ざるべし 始めは新照院城山の西端より平ノ中馬場俊寛堀を経て野菜町通り辺より弁天台場に注ぎしものなるべし 往年の大水に草牟田新照院よりの水は皆此の通路を流れたりといふ 其の後大要清滝川の流域に移り以て城下の編成に当たり今の形状と成りしものなるべし 故に今の流域は天然の川筋に非ず 西田橋より下流は左岸皆堤防を設け右岸は之を設けず大水に際して対岸に溢る如く設計されたり 是は一には市街地人家櫛比の地域に浸水せざらしむる為めと直接城下第一線の防御線を形成せしものなり 故に十年の役にも官軍之を応用せり」

エ 「照国神社旧南泉院馬場の処に榎の大樹蕃茂せる堤防と外濠ありて二橋を架す北方に在るを大手橋といひ南方に在るを山下橋といへり 而して今の裁判所の角には枳形江戸城の目附ありて上に松樹を栽えたり（是は明治五年臨幸の際撤去せられしと記憶す） 此より東南に俊寛堀あり又御着屋の周囲には堅固なる石壁ありて伊勢殿屋敷花岡屋敷の石垣と共に一種のカポニールを成形したり」 ※[カポニール] = [出丸]

オ 「此より西本願寺昔の黒木屋敷の石垣に続き南一帯は堤防あり 此に連りて東方に小松殿屋敷加治木屋敷米倉の石壁あり其の東に名山堀ありて一層堅固に設備せられたり それより又肝付屋敷入来院屋敷の石壁あり 今の高野山の処より海岸に亘る一帯の堀と之に沿える堤防ありて屋形東方の外濠と石垣とを構成したり高野山の門前に吉野橋あ

※鹿児島県教育庁文化財課

り 今の県庁の門前通所謂屋形の馬場に新橋あり
平佐北郷殿屋敷と琉球館とは自然のカポニールを
形成したりき」(註2)

カ 「造士館の処は太守の居館にて本丸たり 其の西
に接せる二の丸跡は二の丸 病院昔時の御厩の処
は別に一郭を成せり 而して城山の東半部を禁入
山と為し東西南北四十間毎に楠樹を植え本丸二の
丸を俯瞰する能はざらしめ今の城山公園茶店の西
方に門を構設したり 亦新照院の登り口番屋坂の
処にも門を設けり 岩崎谷の侍は直接本丸背後の
警衛に任命されたるを以て三月五日の節句の祝九
月の放生会等には各戸同時に祝宴を開くを禁せら
れ居たりという されど新照院の方は番屋坂の門
外に侍の居住せしを以て斬る制限なかりしといふ」

キ 「今の女子師範学校より裁判所に至る広き一郭に
は各官衙学校皆集まれり 本丸の前なる地域即ち
今の市尋校の辺は広場にて空地たり 県庁の処は
宮之城屋敷と垂水屋敷なりしといふ」

ク 「城門を入れば必ず堅固の石壁ありて右か左に曲
かり以て城内に進む如くになせり 是は城外より
敵人が競うて城門を破毀して突入せんとする氣勢
を殺かんが為と亦此に人員を集合して其の人数を
計りしを以て枡形と称せりと云う 蓋し平生より
此の枡形は幾人收容し得るかを計量せしものなる
べし」

ケ 「枡形の遺跡は新照院なる佐多の屋敷の下岩崎谷
の中程道路の屈曲せる処 即ち上の平なる谷山病
院中の平なる児玉実良弁護士の処なり 又東方に
ては聯隊区司令部及び琉球館の石垣に当た所なり」

コ 「城下町の道路の中には通行の際知らず識らず方
角を直角に取違ふ如く経始されたるあり 乃ち石
灯笼通り重信下駄店より黒松洋品店前に到る道路
は南方に通しあるもいろは屋俊寛堀跡より漸次東
に円の四分之一を画き本願寺の前通りに至れば東
西に通する道路となるあり 是は熊本城下紺屋町
の処にも仙台北城下にも之れあり 他の城下にも蓋
しあるならん 伝へ云ふ敵人の侵入する時知らず
識らず方角を取違ふる為なりと」

サ 「元来城下に集まる道路は主要地点より一望の下
に瞰制せらるる如く編成せらる今城山の西端なる
新上橋上辺の高地に立ては北方甲突川に沿ふ道路
西田街道田上街道高麗町荒田街道皆之を望見する
を得 又磯街道は戦術上の価値少きを以て吉野を
通過して重富及び蒲生方面に向ふ道路必要と為る
十年役に私学校軍は横川山田吉野よりして城山に
進入したり」

シ 「大着屋の南方より地藏角までには一帯の堤防あ
りて此に大榎樹繁茂し町家と侍屋敷との境界を為

して自然に防火線を形成し 一面子供の遊処今の
小公園と為したりき 而して地藏角より以南は南
林寺墓地亦自然に境界を為して防火の効用を為せ
り 此の間石灯笼通角今の重信下駄店の所には大
なる町門ありしが是は明治五年行幸の際撤廃した
り」

(2) 唐鎌祐祥氏の研究(唐鎌 1992)

ア 歴史地理学的手法を用いて、鹿児島城下の「城下町プラン」を提示。

イ 上方限・鹿児島城正面・下方限で角度が変わり、鶴が羽を広げ桜島に向かって舞い立とうとしている様子を指摘。

ウ 吉野橋・新橋堀ノ面と大手橋・山下橋堀ノ面・俊寛堀の内側および城山が、鹿児島城の「内郭」であることを指摘。

エ 内郭の公的な御門が参勤交代道、千石馬場の始まる枡形御門であることを指摘。



第1図 唐鎌氏による鹿児島城下町プラン(唐鎌 1992)

(3) 中田勝康氏・秋山賢治氏の研究(中田・秋山 1992)

ア 鹿児島市の城下町形態とその町割りについて整理し、現在の地域用途と道路網への影響と問題点等を指摘し、城下町遺産を都市づくりに生かしていく為の基本理念について論述したもの。

イ 「城山をとりこみ東南の麓一帯に居館を構え、家臣団の屋敷を周囲におき、さらに町人をその外縁部に集住させるという形で、新しい長期的展望で城造り、城下町の形成がはじめられた」

ウ 「城下町形態は開放型、町割は長方形型短冊型であるが、上級武士屋敷は正方形型である」

エ 「家久が鶴丸城に移ったころは上町が主な町であって、唐人なども居留しているほどであったが、近世的な城下町の発展のためには山の迫っている狭い上町だけでは不十分であるので、家久は鶴丸城を築くとともに下町方面の建設にも力を尽くした」

オ 「甲突川の川筋を改めて埋立を行い、士屋敷・町

屋敷を建てさせた。ただし、西田橋より下流は、左岸は全て堤防を設けたが右岸は設けず、軍事的な必要から大水の際は右岸に水が溢れるように設計された」

カ 「町割の基本は、土屋敷は長方形の短冊型で区画が整然となされているが、町家は埋立等による継ぎ足しのせいもあってか、町割が不規則である。武士を中心とする色合いが色濃くでている城下町であるともいえる」

キ 「城下町としては湾港を中心とした町型態で、今で言えばウォーターフロント都市であったと言える」

ク 「川と海とでガードされていたこともあり、道路網は完成度の高い格子状に組まれ、城下町特有のT字路、カギ型路という迷路的な道路が少ない」

(4) 木島孝之氏の研究（木島 1995）

ア 「薩摩・大隅両国および日向国諸県郡で六十二万石（後に琉球を加え七十七万石）を有し、加賀前田氏に次ぐ大大名である島津氏の場合、その居城鹿児島城は周知のとおり、所領の規模とは駆け離れて簡素なものである。」

イ 「この鹿児島城の簡素な縄張りがどういう理由によるものかについては、今まで特に検証はされず、一応、次の二つの見解で理解されてきたようである。1－関ヶ原での敗北を幕府に赦免してもらったため、また大藩ゆえに幕府の警戒を解くための遠慮から簡素な館造りの城に止めた。2－「城はいらぬ者也、尤堀は之無く候とも事かかぬ也、土程よき堀は之無く候」（『島津家御旧制軍法 巻鈔下』）という島津義久の言葉に表されるように、島津氏は城を重視しなかった。」

ウ 「本稿では、鹿児島城の縄張りにおける特殊性（つまり大大名に似合わぬ簡素な縄張りを持つこと）について、それを生み出した要因は何だったのかという問題を、島津氏の権力構造という観点から検証することを目的とする。」

エ 「島津氏の権力体制が豊臣政権への対応を通して義久、義弘の「両殿」体制となり、慶長期には家久を加えた「三殿」体制へ展開し、それが慶長9年（1604）までは維持されたことを確認した。」

オ 「まず、「居所」をみると、その規模は長辺 175m、短辺 150m程の方形館で、三方は（地表面からの）高さ 3m程の石垣で固められ、外には幅 15m程の水堀が巡る（南西側の水堀は後に埋められる）。南西面の類線には大きな横矢掛けが設けられ、南東面の虎口は二折れする内枳形虎口となっている。この横矢掛け、内枳形虎口および総石垣の採用は、織

豊系の築城技術を導入した結果と判断される。」

カ 「次に山上の「本丸」・「二丸」についてであるが、現在、「本丸」はNHK送信所となり全く原型を止めておらず、「二丸」は城山公園の駐車場としてかなりの破壊を受けている。そのため山上の縄張りについては全容を解明することは不可能である。ただ「二丸」については、現在ドン広場と呼ばれる部分に遺構が良好な状態で残るため、『元禄九年鹿児島城絵図』と併せて山上の縄張りがある程度推定することができる。」

キ 「「本丸」と「二丸」の配置であるが、『元禄九年鹿児島城絵図』から両者は谷あるいは大空堀によって隔絶していたものと推定される。「本丸」跡であるNHK送信所（標高 110m強）と「二丸」跡であるドン広場（標高 100m）の間は低地となり駐車場に使用されている。この低地が本来、谷あるいは大空堀であったと推定される。「本丸」と「二丸」の隔絶した関係は戦国期以来の「南九州型」プランをそのまま引き継いだものである。」

ク 「「二丸」跡に比定されるドン広場の周囲には高さ 6～10mの巨大な土塁が巡る。この土塁は版築にしてはあまりに規模が大きく、また高さや天端の幅が不均等であることから、自然の窪地を掘り込み構築したものと考えられる。土塁の塁線は自然地形に任せたもので横矢掛け等の技術的な工夫はなく、枳形等のテクニカルな虎口もみられない。また、山下の「居所」とは対照的に石垣も用いられていない。この現状からみて「二丸」には、「居所」にみられたような織豊系プランによる改修は施されなかったと判断される。おそらく「本丸」も「二丸」と同様の縄張りであったと推定される。」

ケ 「以上のことから「本丸」・「二丸」は、戦国期以来の「南九州型」プランを持つ上之山城の縄張りを殆ど改修せずに使用したものと推定される。」

コ 「山上は戦国期以来の上之山城の旧式の縄張りそのまま使用したものであり、そこには積極的な改修の意志は何えないのである。これは単に経済・労力という物理的制約では理解できない問題である。」

サ 「『文政前後城下図』をみると、大竜寺とそれに隣接する武家屋敷の一画が正方形の区画（120m角）を成している。これは内城の形をそのまま踏襲しているのではないと思われる。すなわち、現在の大竜小学校の敷地そのものが内城跡ではないかと推定される。内城に関して『島津字伝記大概』に、「築城一重の屋敷」とあることから、この推定はほぼ妥当ではないと思われる。これらのことから、内城は方 120mの規模を持つ単純な方形館であったと考

えられる。」

シ 「方形館とそれに直交する街区は、典型的な守護所の形態である。直交軸を基本にした守護所の整然とした形態は、古代官衙以来の「政庁の形＝方形」という概念に規定されたものではないかと思われる。大内、武田、大友氏等の伝統的な守護系戦国大名が、戦国期という恒常的な軍事的緊張下においても単純な方形館のスタイルにこだわったのは、形骸化したとはいえ、守護が持つ「公権」の意味を強く意識していたためではないかと考えられる。島津氏は有力国人が割拠する中で成長した戦国大名であるが、自らの権力基盤である国人衆との関係は支配的というよりも契約的なものであった。それは九州征伐における軍団の結束のよろさや朝鮮役における軍役の履行のお粗末さから伺い知れる。この国人衆との関係の脆弱性を補うために、島津氏は伝統的な守護の公権を強く意識し、その結果、居所が典型的な守護所の形態をとったのではないかと推察する。」

ス 「島津氏には、「当主の居所のかたちは、方形館と詰め城であるべき」という、居所に対しての「型」とでもいうべき基本的概念が存在していたことが推察される。」

(5) 松尾千歳氏の研究（松尾 2005）

- ア 寛文 10（1670）年の「鹿児島城下町割図」を基に、建設当時に近い城下を復元。
- イ 黄門様（18 代家久）の頃、城山の麓から俊寛堀付近に流れていた川を清滝川の流れに代え、さらに現在の甲突川に改められたのが 17 世紀後半であることを指摘。
- ウ 市役所前の電車通りとその延長線上に、高さ三間半（約 6.3m）、長さ五百間（約 900m）の護岸が築かれていたことを指摘。
- エ 現在の易居町辺りに出島形式の「築嶋」が、寛文 10（1670）年には築かれていたことを指摘。
- オ 寛永 13（1636）年の「薩州鹿児島衆中屋敷検地帳」に「上」は「新堀より上」、「下」は「新堀より下」と書かれていることを指摘。ただし、「新堀」が幕末と同じ現在の名山小学校北東境なのか、それとも新橋堀ノ面なのか明確にしていない。

(6) 下鶴弘氏の研究（下鶴 2008）

- ア 鹿児島（鶴丸）城の総構えは、唐鎌祐祥氏の考えと一致している。
- イ 唐鎌祐祥氏の城下プランを基に、千石馬場と堅馬場の延長線が 120 度で交わり、その角度を二等分する位置に鹿児島城の御楼門が築かれていることを

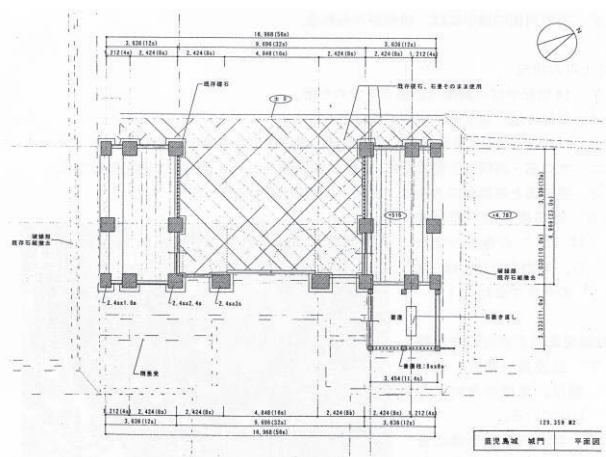
指摘。

(7) 徳永和喜氏の研究（徳永 2008）

- ア 「義弘の城と支配は防禦的機能を優先するのは当然であるが、家久の新城構想は、新城築城が目的ではなく、新時代の起点となりうる構想を抱いていたかにかかっている。」
- イ 「鹿児島城築城にあたり、江夏（黄）友賢に城地を占わせ」「まさに鹿児島城は四神相応の地であるとの占いの結果でもあった。もう一つは屋形は「巽」の方向に向けて建設すること。巽とは、辰と巳の中間で東南向きに構えることを説いたものであり、この築城に最適な方角である「巽」を守れば「千年不拔の基」であると占いの結果を示している。」
- ウ 「結論的には義弘は戦国武将としての城認識であり、家久は近世大名としての城認識であるといえる。」
- エ 「鹿児島城は海岸からの防備という弱点が指摘されるが、それこそが鹿児島城が近世的な城郭であることを意味するといえる。」
- オ 「家久は秀吉や家康という統一政権の実力の有様を実体験した結果を集約した、鹿児島城及び城下町・港町の都市計画を企画・実践した。」

(8) 揚村固氏・守真和弘氏の研究（揚村・守間 2010）

- ア 御楼門の桁行方向は、4 尺・8 尺・8 尺・16 尺・8 尺・8 尺・4 尺（1：2：2：4：2：2：1）の整数比である。
- イ 御楼門の張間方向は、10 尺・13 尺である。
- ウ 「論理的な比例関係は類例である佐賀城「鯨の門」、熊本城「南大手門」などには確認できず、鹿児島城「御楼門」が潔癖とも言えるほど周到に計画・設計された平面寸法体系で建設されていたことが明らかとなったのである。」



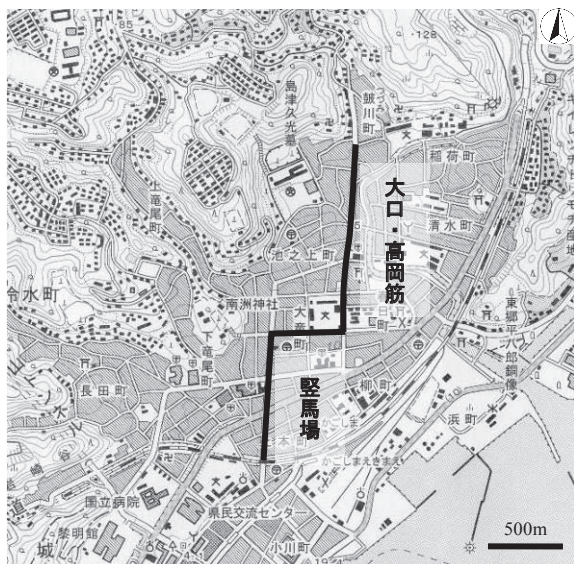
第 2 図 御楼門の柱間寸法（揚村・守真 2010）

3 鹿児島城下の状況

江戸時代初頭の町割が現在の道路と同じではないことは承知しているが、明治30年代の地図と比較しても一部の地区を除いて江戸期の町割を踏襲していることがわかる。また、現在の地図の方が場所をイメージしやすいことから、現在の地図を基に鹿児島城下を各地域に分けて、北の方から詳しくみていくこととする。

(1) 上町の状況

- ア 14世紀半ばに島津氏が拠点を求めた所。
- イ 東福寺城、清水城、内城が築かれた。
- ウ 1550年に15代貴久が築いた内城は、東西南北を基軸としている。
- エ 内城は、標高10mを測る旧砂丘上の最も安定した場所に立地する。
- オ 内城近くに稲荷川河口があり、港として利用された。
- カ 歴代の当主が眠る本立寺と福昌寺が、一帯の地域に含まれる。
- キ 大口筋・高岡筋と豎馬場は、250mの距離において平行して南北に延びる。
- ク 豎馬場と館馬場の方向は、 150° の角度で交わる。
- ケ 豎馬場と堀の間の筋は 120° の角度で交わる。(城門前の筋とは 150° の角度で交わる。)



第3図 上町周辺の状況

(2) 城山周辺の状況

- ア 土塁が高さ10m・幅25mの規模で、400mにわたってみられる。
- イ 土塁は盛り土ではなく、削り出しによってつくられている。
- ウ 削りだした土は、本丸で使われた可能性がある。
- エ 土塁内部は、南北方向に合っている。

オ 一部分に空堀がみられる。

カ 現在の展望台トイレ側にも、空堀が埋まっている可能性がある。

キ 城山と草牟田に延びる台地は、切り離されたと考えられる。

ク 谷の両側の途中には、枡形がみられる。

(3) 鹿児島城付近の状況

- ア 幅400mの最も狭い平地を利用して、城の中核部を築く。
- イ 標高108mの尾根は、草牟田の台地と切り離して、上山城として利用。
- ウ 間近に迫る深い海は、大型船が着岸できる港として利用。(松尾千歳氏指摘)
- エ 鹿児島(鶴丸)城の軸は、尾根の方向に合わせている。
- オ 尾根の前面は急崖の部分もあり、面をそろえた可能性もある。
- カ 諸施設も城の軸に合った方向でつくられている。
- キ 城門前の筋と千石馬場からの筋の間隔は、130mである。
- ク 千石馬場からの筋と千石馬場は、枡形のところで 150° の角度で屈曲している。
- ケ 堀と堀との距離は、900mである。
- コ 中町の海岸に平行する筋は、千石馬場からの筋と上町・下町を分ける線の交点を中心として、 20° 、 30° 、 37° の方向に延びている。
- サ 城正面の石垣上部は御楼門を挟んで、100mと50m(2:1)である。
- シ 御楼門と両堀との間隔は、600mと300m(2:1)である。
- ス 御楼門中央部の柱間の距離は、32尺:23尺であり、 $\sqrt{2}:1$ の関係である。



第4図 鹿児島城付近の状況

セ 御楼門中央部の石畳は、礎石に対して 45° の角度で敷き詰められており、複雑な振動に対応したものと考えられる。

(4) 千石馬場周辺の状況

ア 尾根の前面は急崖の部分もあり、面をそろえた可能性もある。

イ 城山の地形に平行した方向に、「馬場」を通す。

ウ 「馬場」同士の間隔は、130mを基本としている。

エ 「馬場」間に筋を通す場合は、ちょうど二分する位置に設けている。

オ 「馬場」に直交する方向に、「通」を設けている。

カ 「通」同士の間隔は、130mと180mを基本としている。

キ 谷山街道は、千石馬場をちょうど二分する位置に設けている。

ク 谷山街道の両側は、130m×2と180mの区画から成っている。

ケ 千石馬場は900mの直線である。

(6) 西田町の状況

ア 西田本通りと千石馬場は、西田橋のところで 150° の角度で屈曲している。

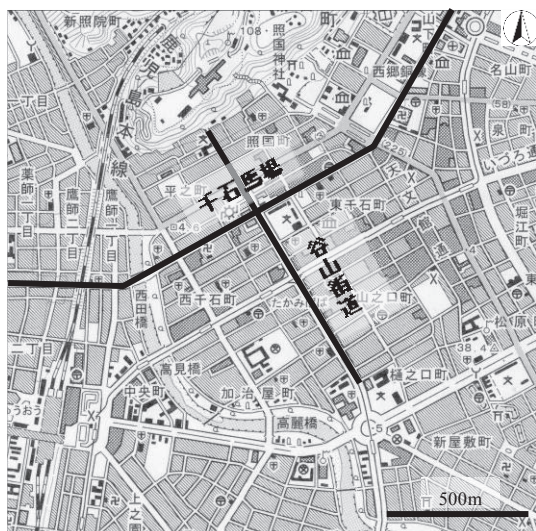
イ 西田本通りは、西田橋から筋違橋まで900mの直線である。

ウ 西田本通りは、東西方向である。

エ 武岡台地へ通ずるには、地形的に水上坂が最も適している。

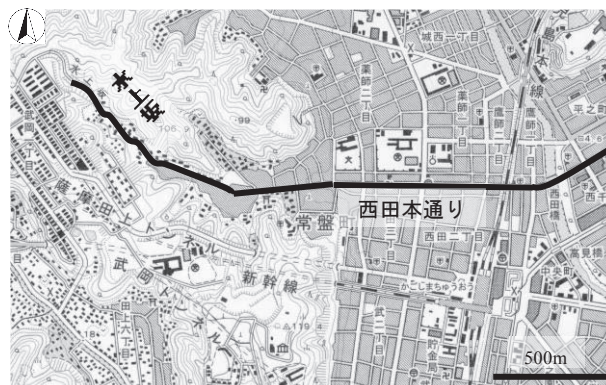
オ 西田本通りと水上坂は、薩摩街道（出水筋）である。

カ 西田本通りの両側には、50mの間隔で筋が平行している。



第5図 千石馬場周辺の状況

キ 西田本通りの北側は、東西南北130mを基準に町並みがある。



第6図 西田本通り周辺の状況

4 高度な計画性

(1) 地形の利用

鹿児島城下は典型的な火山地形であり、シラス台地が深い海まで迫って低地の面積は限られている。90mもの比高差をもつ尾根部は、削り出しによる長大な土塁や空堀で強固な防御用としている。また、深い海は大型船が着岸できる港に利用し、海洋都市としての拠点となった。これらに挟まれた最も狭い平地に中枢部を建設することで、四方全てが隙間無く守られることになる。平地部分は曲輪数も少なく天守閣をもたないことによって、表向きには徳川家に対する恭順を示すが、地形を巧みに利用し防衛機能を重視した強かさも窺える。また、商業区や居住区を南に広がる平地部にもってくることによって、将来の発展性を考えていたと推察される。

(2) 四神相応の地

鹿児島城の場所を選ぶにあたっては江夏（黄）友賢に占わせ、四神相応の地とされた。中国の風水思想に基づくもので、青龍（東）・白虎（西）・玄武（北）が山で囲まれ、南は青龍や玄武から流れてくる水を受ける朱雀であり、その先に水で運ばれた気が分散しないように案山・朝山と呼ばれる山があると良いとされる（曾我 2012）。鹿児島城下は三方を山やシラス台地に囲まれ稲荷川と甲突川が流れ、錦江湾の先に桜島があり、風水思想の理にかなっている。また、江夏（黄）友賢は屋形を巽（東南）の方向に向けることを説くが、これは城下を設計した後に御楼門がこの位置にくるように、後付けしたとも考えられる。なお、城の鬼門除けとしては北東側の石垣が隅欠けになっていることはよく知られており、寺院としての鬼門除けは稲荷町に所在した護国院である。

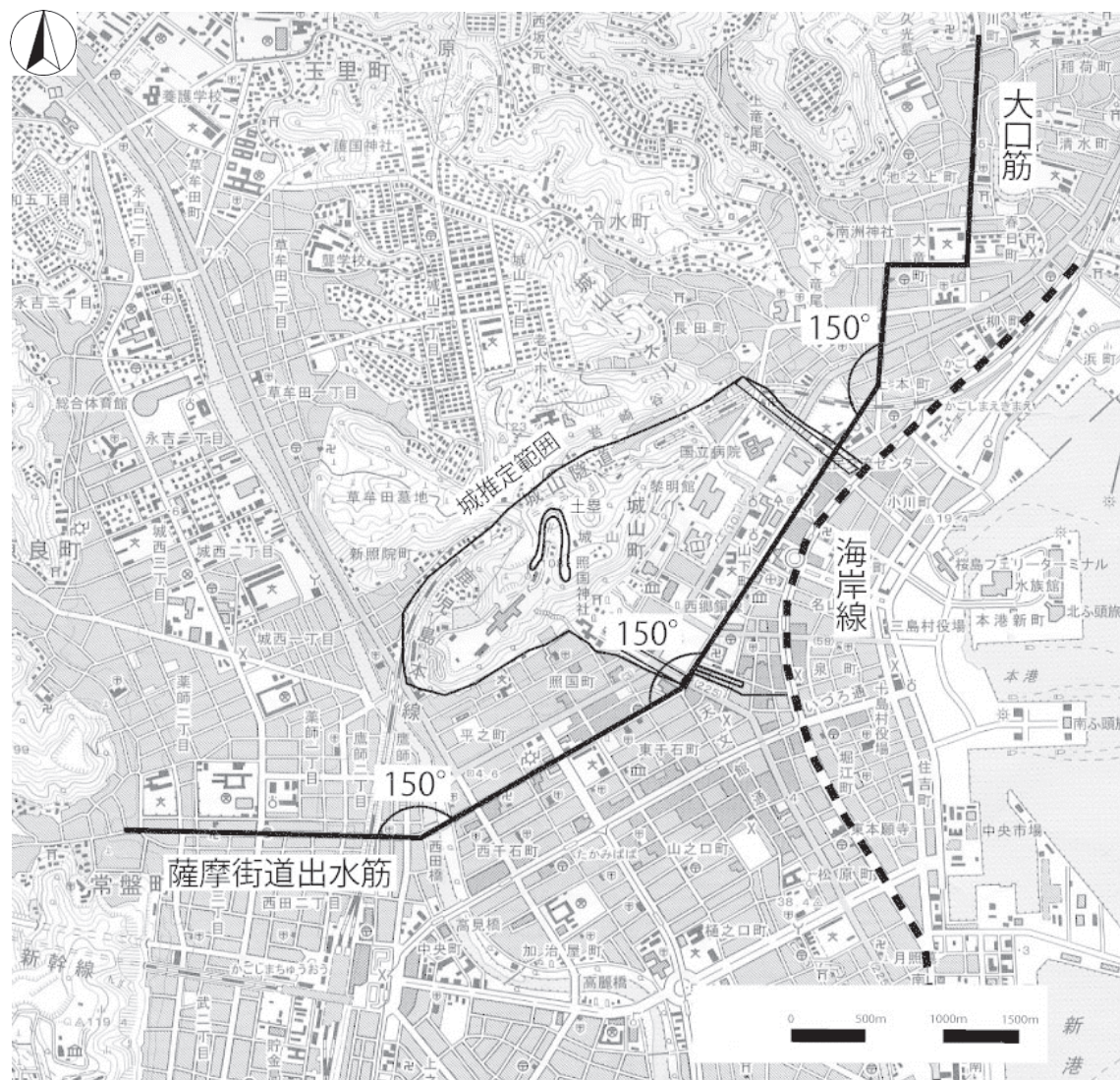
(3) 街道の方向と道の屈曲度

大口筋・高岡筋を南北に、出水筋を東西に設定している点は、古代以来の条里の思想が窺える。両方の筋の間を 150° の角度で3回屈曲させることによって、ぴったりと主要街道の東西南北 90° に合わせている。最も狭い現市役所裏に、直線道をもってきていることも見事である。現在の県立博物館前や平之橋を、車で走り抜けても曲がった感覚は少ないことから、佐多氏が述べるように、知らず知らずのうちに違った方向に向かわせようとしているかのようである。なお、現在の鹿児島地域振興局前の道は、海岸線に沿ったカーブを描いているが、鹿児島地域振興局裏と長田中学校境に直線道であった痕跡を留めている。それぞれの直線道は900mを基本とし、両側各面は整然とした方眼状の町割である。 150° の屈曲部は川や堀を利用しており、方形の区画からうまく除外している。谷山街道は、千石馬場を垂直二等分する位置に設定しており、城下の拡大に備えたかのようである。以前の甲突川は現在の清滝川であり、

これを改修して広げた敷地が「新屋敷」という地名になっていると考えられる。この河川改修を施行した時期が、松尾氏によると17世紀後半ということになる。また、西田本通りの北側は下級武士の居住区域であったが、南側は明治以降に鹿児島中央駅西口として水田から居住区に変わってきている。

(4) 御楼門の位置

御楼門の位置については、下鶴氏が指摘したように、千石馬場と豎馬場が交わる角度の二等分線上に位置する。これに加え、城内幅である大手橋の堀から吉野橋の堀および主郭部上段にある石垣幅の2:1の所に御楼門は設定している。揚村氏と守真氏が指摘するように、御楼門の位置に関しても周到な計画性が窺えるのである。また、この地点が当時の海岸線から最も近い位置であり、背後から攻められた時、いち早く船で脱出することも想定していたと考えられる。



第7図 鹿児島城下の町並み

(6) 基準とした寸法

地形に合わせた方向については上述の通りであるが、では 130m や 180m などの距離はどこからきているのだろうか。最も多く使われている区画の距離が 130m であり、130m に $\sqrt{2}$ を乗じたのが 180m に近い。180m がおよそ 100 間であることも、何らかの基準となったと考えられる。高見敏志氏によると（高見 2009），築城の際には $1 : \sqrt{2} : \sqrt{3}$ の「大和三角形」が多用されているとのことであり、鹿児島城下においても御楼門の礎石位置をはじめ、町割に使われていたことが推察される。併せて、高見氏が指摘する「直線的な見通し（ヴィスタ）」と「一直線上の配置（視軸）」も築城や町割には重要な視点である。

5 おわりに

以上現在の市街地図を通してではあったけれども、地形を知り尽くした上で陸海交通網を意識し、近世都市機能の充実を図った 400 年前の壮大で緻密な計画性が浮かび上がってきたと考える。今後、発掘調査により 400 年前当時の確実な境や堀跡が確認できれば、当時の計画性の実証されると考える。今後の積極的な解明に期待するとともに、各種分野からのご教示を願いたい。本稿は、2013.06.09 に行われた隼人文化研究会での発表を基にしている。出会った方々に様々な御教示を得た。また、上田耕氏には城についての御教示や文献入手の御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

註 1 引用に際しては、縦書きでは漢数字が使われているものの、横書きであるので算用数字とした。

註 2 現在、館馬場あるいは屋形馬場は鹿児島（鶴丸）城前の通りと考えられているが、「今の県庁の門前通所謂屋形の馬場に新橋あり」とあることから、「館馬場・屋形馬場」の位置については再検討を要する。

【参考文献】

- 揚村固・守真和弘 2010「鹿児島城「御楼門」の復元的研究」『鹿児島県立短期大学紀要』第 61 号 鹿児島県立短期大学
- 唐鎌祐祥 1992『天文館の歴史』かごしま文庫⑤ 春苑堂出版
- 木島孝之 1995「鹿児島城の縄張り構造と島津氏権力との相関」『中世城郭研究』第 9 号 中世城郭研究会
- 佐多武彦 1937「戦略戦術上より観たる鹿児島城下」『陸軍中将 佐多武彦述回顧六十年』
- 下鶴弘 2008「鹿児島城の総構えについて」『2007 年度

鹿児島国際大学生涯学習センター特別講演会報告書 鹿児島の埋もれた歴史遺産に光を』 鹿児島国際大学生涯学習センター

曾我とも子 2012「近世の城郭立地に関する風水思想からの考察」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 23 号

高見敏志 2009『城と城下町 築城術の系譜』技報堂出版

徳永和喜 2008「鹿児島（鶴丸）城築城にみる思想 一家久の「城認識」と展開を中心に」『黎明館調査研究報告』第 21 集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

中田勝康・秋山賢治 1992「城下町の比較と街づくりとの関連性」『土木史研究』第 12 号

東和幸 2013「鹿児島（鶴丸）城前後の城と町づくり」『研究紀要・年報 縄文の森から』第 6 号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

松尾千歳 2005「鹿児島県立図書館蔵「鹿児島城下町割図」について」『南九州城郭研究』第 3 号 南九州城郭談話会